

人間（ひと）は一人じゃ生きられない

反町 敏子

文京区でひとり暮らしをしている母は、94才で要介護2です。一人で住まわせる年令ではないので、姉と私がいくら同居を勧めても全く応じる気配はなく、

「この家は死んだお父さん「夫」が、私のために建ててくれたんだから、他の土地になんか絶対に行かない。この家で死ぬの。ほっといて」と怒り出す。着物の着付という仕事を持ち、いつでも明るく元気だった母が、88才の時、心不全を起し入院。医師から、もうあきらめて下さいと言われ、病室に親族が呼ばれたにもかかわらず、奇跡的に回復し、二カ月後に退院。帰宅するなり、仏壇に手を合わせ「お父さん、私ね、日頃の行いが良かったらしくて、もう少し生きていなさって、神様に追いつかれて戻ってきましたよ」と報告している陽気な母。しかしその母

が二年を過ぎた頃から時々おかしな電話をかけてくるようになった。

「お金を七万円盗まれてくやしい」

「変な若い人が来て、オニギリと水をくれって、私を夜中に起すのよ」
しかし姉と私はいつもしつかりしている母を見ていたので、きつと夢をみたのよ等と軽くいなしていた。その事が認知症の始まりだったとは全く考えることすらなかった。

ある日、平日に行ってみると、あれ程きれいだっただ母の家の様子が一変している。掃除も洗濯もしておらず、枯らしたことの無い仏様の花が枯れ、真夏なのにエアコンも使用せず冬服を着て汗をかいている。三社も新聞を契約したらしく、沢山の新聞がテーブルの上に積まれている。

ただならぬその事態に驚き、翌日病院で検査を受けさせた。医師から「間違いなく認知症です。これからはもつと幻想や幻覚が増え、人によつては人格が変わって、怒りぼくなる場合もありますが、決して家族の人は否定したりしないで下さい」と言われ茫然とする。区役所に行き、

紹介されたケアマネージャーの人と相談し、週三日、買い物と簡単な調理をお願いする事に決めて、ひと息ついていた日々。

ある日、姉と二人で不用品の整理をしていると、一枚のメモが出てきた。紛れもなく母の文字でした。

「ヘルパーさんに、今日は何を買って来ますかと聞かれるのが怖い。だって私の頭、おかしくなっていて、品物が浮かんでこないのに。品物見えないのに：答えられないよ。でも、もうハンペンのバター焼きはイヤ」と書いてあった。ごめんねお母さん。子供に心配をかけまいと、ずっとずっと我慢していたんだね。認知症の理解しにくい部分を思い知らされた時期でした。ヘルパーさんをこわった分、私達も多忙をきわめ、千葉に住む姉が足を骨折したり、埼玉に住む私の方も、娘の出産があったり、私自身も緑内障の手術を受けたりと、母の介護がきびしくなりつつあった頃、母の家の近くに住むYさんが見え、近く、ある施設がオープンするから行ってみたらと言われ、その施設を訪れました。その施設は母の住む文京区にあり、母の家から歩いて10分位の処にありました。

介護予防拠点として活動し、介護が必要になっても、自宅に住み、家族や通所の仲間と一緒に不安のない生活を送りたいという願いに応える場所だと説明され、願ったり叶ったりと嬉しさがこみあげてきました。住宅地の中にあるその施設は、普通の家のような優しい佇まいたたずまいで環境抜群でした。翌日、母を連れて面接に行きました。笑顔で老人達を介護している若いスタッフの方の態度に母は感激し、ここに通うと言ったので、その場で契約をし、現在は週6日、朝の9時から夕方6時までお世話になっていきます。所長を始め、スタッフの人達が四季折々に考えてくれた行事を楽しみ、三度の食事、おやつ、入浴を済ませ、車で送られて帰宅します。一見、安定したかに見える母の症状は確実に悪くなりつつあります。昨夜も、11時頃に電話があつて、

「明日、旅行に行くから二万円持つてすぐ来て頂だい」
「ハイ分りました。」と。

取り合えず、分りましたと言わないと、同じ内容の電話がずっと続くからです。通所している家族の人とスタッフの人と話し合う主旨で過日、

家族会の発足がスタートしました。この家族会の発足により、自分の親に起きている変化や介護の悩み等を話し合っている内に――大変なのは自分達だけじゃない。悩みは一緒なんだ――と随分気持ちが悪くなりました。もし家族の人が認知症になったとしても、決して世間に隠すのではなく、謙虚な気持ちでご近所の応援を求めべきです。隣家の人が母の家のゴミ出しを引き受けてくれます。部屋の電気が灯れば、施設から戻った、電気が消えれば寝たのだと、いつも気にかけて下さる地域の方々。母がもしこの小規模多機能居宅介護の施設に通所していなかったら、私達自身の生活や体が壊れていたかも知れません。これから先、母の認知症が進み、私達の名前や顔を忘れて、どちら様ですか、等と言われても、動揺しないで対応しようねと姉と約束しているのですが。自分の子供や、自分の家が分らなくなるなんて、何と悲しい病気なのでしょう。か。

一日も早く医学がもっともっと進み、難病やガン、認知症等で苦しむ本人や、家族の人達に新薬や治療法が開発されたという朗報の届く日の訪れを、一日千秋の思いで待っています。

そして、何よりも、人間が人間として希望を持って働ける国であり、安心して老後の生活が出来るように、今や老人国となりつつある日本において、福祉の充実を計ることこそが、最も大切なテーマになるのではなからうか？政治家の方々は、もっと物事の問題に対して真摯な眼を向けて取りくんで欲しいと思います。私達も自分を取りまく地域の中で、自分に何が出来るか、何に協力すべきかを考え、行動する時代に入ったのだと思われます。日本だけではなく、世界中から戦争が起ることを願く、子供や弱者を、犠牲にしてはならないという風潮の高まることを願わずにはいられません。

母にたった一日でいいから、70代の頃のお母さんに戻ってと言うと、
「失礼ね、私はまだ78才になったばかりよ」と言う。母に「今、楽しい？」と聞くと、「ワ.カ.ラ.ナ.イ」と笑う。不意に施設に行き、遠くから母の様子を見てみると、何やら楽しいそうに談笑している。決して家では見る事のない表情で―。

その母を見て私は、人間は決して一人では生きて行けないのだと痛感

した。そして自ら命を断つことなく、老いてなほ健気に生き続けていく事の大変さを、母の認知症によって知らされ、多くの人達との出会いに感謝したい。例えばそれぞれの出会いが、一期一会であっても、感謝の気持ちは変わらない。